

令和5年度事業報告書

公益財団法人名古屋みなと振興財団

I 総括事項

公益財団法人名古屋みなと振興財団は、名古屋港における海事思想の高揚と海洋文化の普及並びにガーデンふ頭における賑わいの機会と場を提供する各種事業を実施した。

令和5年度の名古屋港水族館の入館者数は、約244万人となり、開館翌年度（平成5年度）の約291万人に次ぐ、歴代2位となった。要因としては、新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、外出機会の拡大に加え、訪日外国人客が増加したこと、特別展が好評を博したこと、シャチの公開トレーニングや様々なコラボレーションイベントなどをSNSで積極的に発信し、話題になったことが考えられる。また、名古屋港ポートビルの展望室、名古屋海洋博物館及び南極観測船ふじにおいても、昨年度より入館者数が増加した。

なお、今年度は、名古屋港水族館の4期目（指定期間10年）の初年度であり、名古屋港ポートビル、南極観測船ふじ及びガーデンふ頭臨港緑園の各施設については、5期目（指定期間5年）の指定管理者として運営を行う初年度となり、これまで以上に施設の安心・安全、公平・公正な利用及び管理運営の効率化を推進した。

1 公益目的事業

(1) 海事思想及び海洋文化の普及に関する事業

① 体験プログラムを通じた海洋文化の普及（資料1）

小中学生（大人含む）若しくは小学生とその家族（保護者）を対象とした水族館内でのスクール、講演会など主に水生生物に関する知識を深めるため、次の各事業を実施した。

ア 水族館ではスクールとして、例年「君もドリトル先生になれるか！」「もっと知りたい！ダーウィン教室」の2種を実施している。前者は、小学生とその家族を対象にバックヤード見学を中心とするもので、夏休み期間に16回を開催し、141組385名の参加があった。後者は、バックヤード見学だけでなく作業や実験・観察を行うワークショップ形式のもので、様々なテーマで8回開催し、38組113名の参加があった。また、閉館後の夜間の生物の様子を観察する「ナイトウォッチング」も昨年度に引き続き開催し、全6回で65組161名の参加があった。

イ 名古屋市及び全国14都道府県で採用している小学4年生の国語の教科書（ひろがる言葉 小学国語 4下：教育出版株式会社）に、当館のウミガメに関する取組（飼育、放流調査研究など）が紹介されていることから、今年度も市内児童向けにウミガメレクチャーを実施（オンライン開催含め参加40件2,448名）した。このほかに、執筆者自身が教員向けに行う「オンラインレクチャー」と市内の小学校を対象にした「レクチャー&バックヤード見学会」も実施した。前者には北海道や千葉県など全国各地から7校の参加があり、後者には市内13校の参加があった。

ウ 学校団体や一般団体向けのレクチャーを今年度も積極的に受け入れた。オンライン及び館内外でのレクチャーや前述のウミガメレクチャーも合わせると1

年間の総実績は、144件 8,298名となり過去最高だった昨年度を上回った。

エ 海洋環境と生物の関係について解説する常設展示室「エコ・アクアリウム～海の未来を考えよう！～」において、環境教育やSDGs活動に取り組む関係諸機関との連携に努めた(例:名古屋市環境局:エコパルなごやのワークショップ開催やSDGs街(マーチ)への協力など)。

オ 来館者や一般市民からの海洋生物や水族館に関する質問(電話、手紙、メール及び来館者との対面)に対応している。今年度の対応件数は261件であった。

カ 日本水族館協会「第4回トレーニングセミナー」、ウミガメ協議会「第34回日本ウミガメ会議」を名古屋港水族館のシネマ館を会場として開催した。

キ 平成23年度から実施している共同研究「名古屋港におけるスナメリの周年変動」の調査結果を社会教育に展開する試みとして、「名古屋港スナメリ観察会」を実施した。館内でレクチャーを実施後に海上からの観察を行い、20名の参加者のうち16名がスナメリを観察することができた。

② 機関紙による情報提供(資料2)

ア 水族館機関紙「さかなかな」を4回発行した。また、学習教材「かんさつノート」は、生物状況に応じて改訂し、来館した小中学生の希望者に配布した。

イ 生物情報紙「新着!海の生き物レター」は、2回発行した。当館で繁殖したイルカのレイが2歳になったことや、国内最大となったシャチのアースの話題を来館者に対して提供した。

③ 体験プログラムを通じた海事思想の普及(資料3)

広く一般を対象とし、海事に関する知識を深めるため、次の各事業を実施した。

ア 「帆船模型展」「ボトルシップ展」「ボトルシップ体験コーナー」「南極教室」「南極観測船ふじでの星空観察会」「工作教室(3D立体カード工作教室及びペーパークラフト教室)」などの事業を実施した。

イ 親しまれる港づくりの一環として、元旦にポートビル展望室から初日の出を眺めるイベントは、4年ぶりに開催した。

ウ フェイスブックやインスタグラムを活用し、海洋博物館を始めとする各施設の情報発信の活性化を図り、海事思想啓蒙普及に努めた。フォロワー数は、フェイスブック672人、インスタグラム404人となった。

④ 学生の職場訪問の受入れ(資料1)

ア 学生を対象とした職場訪問・体験学習などを受け入れ、水族館及び海洋博物館などでの体験プログラムや解説を実施し、また、学校団体へのレクチャーにより、参加者を通じて一般市民へ海洋文化及び海事思想の普及を図る事業を今年度も実施した。

イ 海洋博物館では、大学の学芸員課程を履修している学生の博物館実習を実施した。

ウ 愛知大学にて「ミュージアム展示論」の非常勤講師として講義を行った。

⑤ ボランティアの育成、活用（資料 4）

ボランティアを育成、活用することにより、当該ボランティアスタッフ及び来館者へ海洋文化及び海事思想の普及を図った。

ア 水族館のボランティア活動は、登録者数 160 名で実施した。例年は館内各所でスポットガイド的な解説業務やスクールの補助活動、朗読会や工作会などを行っていたが、一昨年度まではタッチタンクでの解説のみに限定し活動していた。昨年度は、ペンギンとウミガメの解説を再開したが、今年度はさらに鯨類の解説も実施した。年間活動延べ人数は 899 人、活動延べ時間は 1,292 時間であった。

イ 南極観測船ふじは、解説ボランティア（10 名）、海洋博物館は、解説ボランティア（2 名）とペーパークラフト工作教室指導員ボランティア（1 名）の登録がある。南極観測船ふじは、年間活動延べ人数 116 人、活動延べ時間 268 時間 15 分、海洋博物館は、年間活動延べ人数 16 人、活動延べ時間 39 時間 45 分であった。

⑥ 研究会・ゼミナールの開催（資料 3 及び 5）

ア 共同研究講演会は、水族館と共同研究を行っている名城大学農学部生物環境科学科の檜崎友子助教を招聘し、「バイオロギングで探るウミガメとクジラの暮らしー心拍数モニタリングから見えてくることー」（参加者 119 名）を実施した。

イ 名古屋港を職場とする方々を対象に、各界で活躍中の諸氏を講師に招き、港湾行政や海運の動向、変わりゆく港の役割などを幅広く学んでいただく「名古屋港港湾ゼミナール」（参加者 91 名 24 社）を実施した。

⑦ 指定管理施設（水族館）を活用した海洋生物の展示（資料 5）

海洋生物の展示にあたってはテーマに沿った計画を策定し、生物の健康と飼育環境管理を適正に行い、生物の特性を引き出す展示を行うとともに、飼育担当者や解説ボランティアなどによる解説を行った。

ア 特別展は、令和 5 年 7 月 15 日から 10 月 29 日までガラスのように体が透き通った水生生物を展示する「透ケルトンズ ～ガラスないきもの、硝子のいきもの～」を開催し、令和 5 年 12 月 16 日から令和 6 年 4 月 7 日まで水中に暮らす体が細長い様々な生物を展示する「によろによる EXPO ～魅惑の Long Body～」を開催した。また、“アメリカザリガニ”、“金魚”、“ハロウィン”、“クリスマス”、“正月・干支”、“バレンタインデー・ホワイトデー”“春”など時機を捉えた各種展示を行った。

イ ゴールデンウィークと夏休み期間中は、混雑緩和及びサービス向上を目的にイルカパフォーマンスとシャチの公開トレーニングの回数を増やして実施した。

ウ シャチ「ステラ」「リン」「アース」の 3 頭の展示を継続し、併せて公開トレーニングをメインプールにおいて実施した。シャチが広いプールを活発に泳

ぎ回りジャンプする姿や観覧席の直ぐ目の前に上陸する姿は人気を集めている。11月13日に「リン」は11歳を迎え、体長が5.0m、体重が1.9トンを超えるなど順調に成長し、排卵が確認されている。「ステラ」の排卵も継続しているため、オスの「アース」との分離飼育を適時実施した。10月13日に15歳となった「アース」は体長が5.9m、体重が3.3トンを超え、飼育下で日本最大のシャチとなっている。背鰭・胸鰭・尾鰭の各鰭が大きくなり、オスの迫力が感じられる体形に成長している。3月29日に「ステラ」をグランビスタホテル&リゾートに返却した。3月30日から「リン」「アース」の同居展示を開始した。

エ バンドウイルカの繁殖については、令和2年9月にかごしま水族館と共同で同水族館の飼育個体の精液を輸送し、当館の「ゼロ」に人工授精を行い、令和3年10月にオスの「レイ」が誕生した。「レイ(2歳)」の生育は順調で、飼育員に体をなでさせる姿が愛らしく、来館者の人気を集めている。「ハル(5歳オス)」「ソラ(7歳オス)」「ユウ(10歳メス)」は親離れし、単独でパフォーマンスに参加できている。また、腰部に湾曲的症狀がある「ハッピー(6歳メス)」は、母親の「ウィニー」と一緒に展示プールで飼育を継続しているが親離れができた。9月に南知多ビーチランドと共同で同園の飼育個体の精液を輸送し、当館の「ウィニー」に人工授精を行い、妊娠が確認された。令和6年9月から10月に出産予定である。

オ 平成21年に誕生したカマイルカ「アイ」は13歳を迎え、イルカパフォーマンスに継続的に参加している。ジャンプで3回ひねりを入れる種目「垂直バレルロール」をイルカパフォーマンスで公開し、引き続き好評を得ている。ブリーディングローンで令和3年4月に越前松島水族館へ貸し出していた「ニック」を4月にマリンワールド海の中道に移動した。

カ 平成19年7月25日に誕生したベルーガ「ナナ」、平成24年8月2日に誕生した「ミライ」は、共に順調に成長し、それぞれ7月と8月に16歳と11歳を迎えた。「ベルーガ公開トレーニング」は1日2回実施し、コロナ禍前に実施していたベルーガの生態を更に分かりやすく紹介する「ベルーガの不思議な魚の食べ方」は、9月から土日祝の1日1回で再開した。

キ 6月11日にベルーガ「グレイ」が出産して11年ぶりの繁殖となったが、新生仔は出生後すぐに死亡した。死亡原因は奇形による早産及び呼吸障害であった。

ク 「黒潮大水槽」で実施するイベント「マイワシのトルネード」は、換気循環の改善に取り組み、照明と音楽を時節ごとに変更し、来館者の好評を得た。

ケ 公式ホームページでは、トピックスの頻繁な更新、飼育員による「スタッフコラム(旧 スタッフブログ)」掲載など最新情報の発信に努め、今年度のホームページアクセス件数は2,567万件となった。また、トップページをリニューアルするほか、研究・教育普及のサイトを新設した。また、フェイスブック、インスタグラムなどのSNSへの投稿にも努め、フェイスブックのフォロワー数は37,120人(昨年度36,742人)、インスタグラムのフォロワー数は88,735

人（昨年度 76,848 人）となった。

コ マスメディアに対しては、話題性ある情報提供ができるよう積極的なニュースリリース及び取材対応に努め、64 件のニュースリリース（昨年度 66 件）と 207 件の取材対応（昨年度 229 件）を行い、多くのマスメディアに取り上げられた。

サ 夏期間、年末・年始、春休みは、休館日に臨時営業し、集客に努めた。また、ゴールデンウィークやお盆の繁忙期には、電子チケットの告知を積極的に行った。また、ゴールデンウィーク及び夏休み期間には夜間営業とともに「夜間割引」を行い、今年度の入館者数は 2,436,101 人（昨年度比 118.1%）となった。

⑧ 指定管理施設（海洋博物館・南極観測船ふじ）を活用した海事に関する展示（資料 3 及び 7）

海洋博物館及び南極観測船ふじにおいて所蔵している海事に関する資料を展示公開することにより、海事思想にふれあう場を提供し、来館者への海事思想普及を促した。

ア 企画展として開催した「名古屋海洋博物館のお宝展 2023」では、普段展示していない収蔵資料の中から、寄贈品の「帆船模型」「木彫り人形」を展示し、開催期間中は 27,985 人の人出で賑わった。

イ 企画展として「南極写真展」～第 64 次南極地域観測隊 広報担当が撮った夏の南極～を開催し、開催期間中は 20,253 人（南極観測船ふじ）、23,560 人（海洋博物館）、25,719 人（展望室）の人出で賑わった。また、期間中、学芸員による企画展のガイドツアーを計 4 回実施し、34 名が参加した。

ウ ポートビル 2 階においては、回廊ギャラリーを一般市民に展示会場として開放し、無料休憩施設であるポートハウスにおいては、しおかぜコンサートを実施した。回廊ギャラリーは 11 回、しおかぜコンサートは 117 回の利用があった。

⑨ 海洋生物の調査研究（資料 5）

海洋生物の自家採集及び国内外の関係機関と連携して生物収集を行うほか、血統の登録管理や他園館との生物の交換又は貸借の調整を行うとともに、海洋生物の飼育研究及び希少生物の飼育繁殖研究、フィールド調査、保護活動などの調査研究活動を実施した。

ア 今年度の繁殖については、ペンギン類がジェンツーペンギン 3 個体、アデリーペンギン 1 個体、ヒゲペンギン 3 個体の計 7 個体であった。

イ 野生動物の教育的展示と種の保存事業の促進を目的に、今年度新たに金沢大学環日本海域環境研究センターと学術交流協定書を締結した。

ウ 学術交流協定を締結している京都大学野生動物研究センター、京都大学ヒト行動進化研究センター、京都大学フィールド科学教育研究センター、岐阜大学応用生物科学部、三重大学大学院生物資源学研究科、金沢大学環日本海域環境研究センターなどと共同研究を実施した。

- エ 平成 23 年 8 月に開始した名古屋港内のスナメリの出現頻度調査は、一時中断していたが、京都大学東南アジア地域研究研究所（及び野生動物研究センター）と東海大学海洋学部の協力のもと、平成 28 年度から再開し、共同研究「名古屋港におけるスナメリの周年変動」を継続実施している。令和 3 年 11 月からは、名古屋 ECO 動物海洋専門学校との産学協同教育に関する協定に基づく事業として、同校からの調査員の派遣を受け、ポートビル展望室からのスナメリの定期観測を実施している。
- オ 学術交流協定を締結している岐阜大学応用生物科学部と三重大学大学院生物資源学研究科などから、学芸員課程を履修している学生の博物館実習を受け入れた。
- カ 日本動物園水族館協会、日本水族館協会が主催する各研究会を始め各種学会などに参加し、研究発表を行った。
- キ スタンフォード大学や高知大学などの研究機関と共に北太平洋でのアカウミガメ回遊経路調査 STRETCH (Sea Turtle Research Experiment of the Thermal Corridor Hypothesis)を 2022 年から 5 年に渡り実施している。具体的な調査方法としては、株式会社商船三井の自動車運搬船に乗船し、北緯 25 度から 30 度、西経 135 度以東（アメリカ合衆国の排他的経済水域を除く）のバハ・カリフォルニア沖海域において、2 歳前後のアカウミガメ 25 個体に送信機を取り付けて毎年放流（計 4 回）する。今年度は 6 月 27 日に乗船し、7 月 11 日に放流を行った。

（2）ガーデンふ頭における賑わいの機会と場を提供する事業

- ① 名古屋港観光施設協議会の運営事業を始めとした観光振興事業（資料 6）
- 名古屋港の各観光施設が一体的に協力して相互の情報交換と連携を図り、観光情報を広く提供するため、ガーデンふ頭に立地する観光施設を中心に組織された「名古屋港観光施設協議会」の事務局を務め、観光客誘致に向けた観光推進 PR、誘致営業・宣伝事業を行った。また、当財団単独事業としても各種 PR を行った。
- 修学旅行などが再開している状況を受け、来館を促すために、東京都、大阪府、岐阜県、静岡県への営業活動を行い、名古屋港の魅力を発信するとともに情報収集に努めた。
- 学習旅行として来館した団体や、事前の下見で来訪した教員・旅行社の担当者には、ペンギン羽根カード、環境ノート、団体向けかんさつノートなどを進呈して、今後の学校団体誘致及び情報収集に努めた。加えて、名古屋市を始めとする近隣地域のホテル・旅館に「名古屋港水族館パートナーシップホテル」として登録していただき、ニュースリリースなど、ガーデンふ頭諸施設の情報、割引券及び案内パンフレットを提供し、積極的な誘客に努めた。

② 情報誌の発行

名古屋港の観光施設の情報を掲載した無料情報誌（「ゴーゴー名古屋港（名古

屋港ガーデンふ頭ガイドマップ)」) を、県内外の各所に配布することにより、名古屋港の観光情報を発信し、来港者の増加を図った。

③ 各種観光団体及び市内交通機関との連携を図る事業

県内の観光関係団体に加入し、県内の観光施設との連携及び情報の共有化を図るとともに、名古屋市交通局と連携し、市営交通機関利用者に対して、当財団管理の施設入場料の割引を行い、来港者の増加を図り、この地域の活性化に努めた。また、ガーデンふ頭と金城ふ頭の間を運行している水上バス利用者に対して、当財団管理の施設入場料の割引を行い、名古屋港内の回遊性を高め、観光機能の向上を図った。

④ 指定管理施設（ガーデンふ頭臨港緑園・ジェティ）を活用したイベントの開催（資料 7）

ガーデンふ頭地区におけるイベントの実施、誘致を通じ、港に賑わいを創出し、親しまれる港づくりを推進した。

ア ガーデンふ頭臨港緑園においては、5 月に「名港水上芸術花火 2023」、12 月に「名古屋港 Christmas Illumination 2023」「ISOGAI 花火劇場 in 名古屋港」が開催され、県外も含め多くの来港者で賑わった。

イ ジェティ広場においては、警察署の交通安全啓発キャンペーンなど公共性の高いイベントを積極的に受け入れた。

ウ 11 月に開催の「名古屋港開港祭フレンドリーポート 2023」で事務局を務めたほか、正月三が日に「名古屋港ガーデンふ頭新春イベント」を開催して、賑わいを創出するとともに名古屋港の PR や集客に努めた。県外も含め多くの来港者で賑わった。

⑤ 指定管理施設（ガーデンふ頭臨港緑園・ジェティ）において賑わいの場を提供する事業

ガーデンふ頭臨港緑園及びジェティの運営を通じ、ガーデンふ頭における賑わいの場を提供した。

ア ガーデンふ頭臨港緑園は、緑地維持業務、花壇整備などの施工により、緑豊かで快適な環境づくりの推進に努めた。

イ ジェティにおいては、飲食、物販のスペースを含めた休憩施設としての機能を生かし、水族館を支援するとともに、親しまれる港としての名古屋港の発展に寄与した。

2 公益目的事業以外の事業

(1) 管理運営する施設の利便性を向上させる事業

ミュージアムショップ、レストラン、売店及び自動販売機を運営することにより、公益目的事業の一助とした。

また、名古屋港水族館法人サポーター制度は、平成 26 年 2 月の発足以来、生

物の保護、繁殖研究など、水族館活動の更なる充実に貢献している。今年度末の会員数は、154社264口である。

(2) 船員宿泊施設の運営事業 (資料8)

平成25年10月から、船員宿泊施設である名古屋船員会館(ハーバーロッジなごや)の運営を行ってきたが、老朽化による維持費の増大も見込まれ運営を継続することが厳しいことから、名古屋港管理組合より閉館するとの方針が示され、令和6年1月31日に閉館し、同年2月29日をもって管理運営を終了した。

3 防災機能の強化及び災害対策の取組

(1) 避難訓練の実施

大規模地震に伴う津波の到来を想定した避難訓練を7月に実施し、事前に応募した約1,300名が参加した。

(2) 大規模災害発生を想定した基本協定の締結

葛西臨海水族園、新潟市水族館マリニピア日本海及び名古屋港水族館の三者で「大規模災害相互救援に関する広域連携基本協定書」を令和6年3月31日に締結し、災害時における協力体制を構築した。

4 その他

今年度も引き続き、収入確保に取り組むとともに、話題性の提供や知名度アップを目的にイベントを実施した。

(1) 寄付の受入れ (資料9)

① 水族館 de クルッと寄付 (旧 ガチャ de 寄付)

令和2年度より、カプセルトイを利用した、生き物の暮らしを応援する募金を実施している。水族館インフォメーション付近にカプセルステーションを置き、1回500円の寄付を募って、生き物たちの餌代の一部に充当した。

② ポチっと寄付

「コロナ禍の中、来館は難しいが寄付をしたい」との声に応じて令和3年度に開始したが、移動の制限が解除されたことから、オンライン決済による返礼品のない寄付を令和6年2月29日で終了した。寄付金は生き物たちの餌代の一部に充当した。

③ 名古屋市ふるさと寄附金 (ふるさと納税)

令和3年度より、名古屋市のふるさと納税の返礼品として、入館券などを登録している。登録返礼品は、大人券1枚、大人券2枚、大人+小中券、年間パスポート(大人)、4施設共通券(大人)、大人券+御朱印帳の6種類である。

(2) オリジナル物品の販売

① オンラインショップの開設

ミュージアムショップのオンラインショップを12月に開設し、ぬいぐるみや雑貨などを販売した。

② 魚朱印の販売

令和2年度に開始した水族館版御朱印「魚朱印」(1枚300円)の販売を継続し、生き物たちの誕生日などの記念日などには、オリジナル手作りスタンプを押印した魚朱印を販売した。

③ 御朱印帳の販売

令和2年度に開始した名古屋港水族館オリジナル御朱印帳(1冊2,500円)の販売を継続した。

④ オリジナルLINEスタンプの販売

令和2年度に開始した水族館の認知度や海洋生物への親近感の向上を目的としたLINEスタンプの販売を継続した(1セット120円又は50LINEコイン)。

⑤ 水族館漫画の販売

建設計画から現在に至るまでの出来事を漫画にした「水族館つくろう物語(中編)」をミュージアムショップで販売した。なお、前編は開館30周年を記念して令和4年から販売している。

(3) イベントの実施

① 水族館 de モーニング

過去に実施した「お泊り水族館」の代替イベントとして、早朝の開館前の水族館を見ていただき、南館のフードコート「トータス」で朝食を提供する特別イベントを行った(7月23日、8月27日、各日177名計354名参加)。

② コミックマーケット102

関東地方での水族館や南極観測船ふじの知名度向上を目的として、ふじペーパークラフト・生き物レター集・水族館漫画(水族館つくろう物語)・水族館オリジナル写真集・ミュージアムショップの商品の販売、カプセルトイを使った寄付の受付(返礼品:ペンギンの羽根など)、サンプリングバッグ・水族館割引券・リーフレット・卓上カレンダー・付箋などの配布を行った(8月12日、13日)。